【実践例4についての考察】

○　教材研究をもとに、従来の形式にこだわらない指導計画を作成することにより、自己課題の「目標と評価」を明確にして指導にあたることができるようになった。

○　反省記録を学習活動や目標と関連させて書き込むことができ、授業者以外にもとらえやすくなった。また、T・Tの打ち合わせの資料として有効活用できる。

(3)　「基礎学力向上プランの推進」

○　研究の視点の中で、特に「効果的なT・T指導」と「個に応じた指導の在り方」との関連を図り、個人課題への取り組みに共通性を持たせるようにした。

①　「授業の中で」から

○　個別指導を強化した取り組みにより、学力調査でアンダーアチーバーだった児童が前年の九名から四名に減少した。

○　「授業外」から

朝の活動のミニテストや家庭学習の習慣化が習得事項の把持率を高めた。指導計画をもとにした授業展開や評価の打ち合わせが、効果的なT・Tに結びついた。

(4)　全体考察

①　個人課題の設定

○　教師一人一人が自己の課題を設定することにより、授業改善の視点を明確にして授業実践にあたることができ、意識や意欲の高まりがみられるようになった。

②　授業の反省記録と累積

○　指導計画に反省を記録することから進めてきたが、児童の感想をもとにした記録や座席表を利用した記録の累積など、日常の授業実践から工夫が生まれ、独自の取り組みが試みられるようになってきた。

③　「基礎学力向上プラン」の実施

○　基礎学力向上に向けて共通実践してきた取り組みに効果がみられた。特に、個人課題に上げた授業の改善と日常指導が研究の視点と関連し、課題にそった実践を進めることがプラン推進にも結びついた。

五　今後の課題

(1)　教師間で互いに情報交換できるような場や方法を考え、全体にそれぞれのよさを広めていく必要がある。

(2)　授業実践の反省記録を累積してきたが、指導の成果や変容を数値化して児童の変容を明確にとらえ、指導と評価の一体化を図りながら授業の改善・充実にあたりたい。

(3)　自己課題に対する意識が高まり、一人一人の要求も高くなってきた。それらに応じた資料の提供に努める必要がある。

資料5

時	学習活動	関心・意欲・態度	数学的な考え方	表現・処理	知識・理解
1	「同じ形」に関心を持たせる。 P54 はめ絵をする〈作業〉 → P55 台形の形合わせ〈作業〉 合同の定義 ○きちんと重なる ○裏返ししても ↓「形も大きさも同じ」 合同な図形を見つける。	同じ大きさの図形を見つけるために方法を考えたり、作業をしたりする。	○教科書の絵を使っての作業に意欲的に取り組んだ。「特に裏返ししても」の認識には有効だったようである。		「合同」の意味が分かる。
2 本時	生活の中から合同な図形を提示する。「どこが重なるだろうか」 ↓〈自力解決〉 「対応する」言葉の意味を知る。 ↓ 合同の性質を使って合同な図形を弁別する。 〈なぜ合同なのか〉〈なぜ合同でないのか〉 対応する辺の長さが等しい 対応する角の大きさが等しい この言葉を使って表現させる	○プリントによる作業により、「対応する」の意味はとらえた。 ○図形を選択させたが、ここは1つか2つでよかった。 ○なぜ合同か、なぜ合同でないのかの意味の把握が十分でない。T・Sのプリントを次の導入でいかす。	辺の長さや角の大きさに着目して、合同な図形の性質を調べる。		用語「対応する」の意味が分かる。 合同な図形では、対応する辺の長さや角の大きさが等しいことが分かる。
	合同な三角形ＡＢＣをかいてみよう。 ↓前時のこの理解が大切になる。 ●辺の長さや角の大きさを等しくして合同な図形をかく。	○辺の長さ、角の大きさに注意しながら作図していた。	かき方の発表から合同な三角形のかき方を整理することができる。	対応する辺の長さや角の大きさに着目して、合同な…	

資料6

（基礎学力向上プランより抜粋）

研究の視点	授業の中で	授業外で
効果的なＴＴ指導	●学習意欲の喚起 ●効果的な個への関わり	●指導計画の工夫 ●授業展開の打ち合せ ●評価と指導の工夫
個に応じた指導の在り方	●下位児への個別指導の強化 ●実態をおさえた個別指導 ●ＴＴの機能を生かした学習形態	●朝の活動でのミニテスト ●放課後等の時間を利用した個別指導